

高知県 南国市

平成10年度 高知空港発掘調査

田村遺跡群

現地説明会資料



1999年1月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター

田村遺跡群発掘調査

1. 調査の目的

高知空港拡張整備事業に伴い、拡張計画地内に所在する田村遺跡群について、工事により影響を受ける部分の発掘調査を実施しています。発掘調査は現地調査と遺構・遺物の整理作業を行い、報告書等を刊行することにより遺跡の記録保存を目的としています。

田村遺跡群の発掘調査は平成8年度から開始され、平成10年度は3年目の発掘調査となっております。ピークを迎えています。

2. 田村遺跡群の概要

田村遺跡群は、前回（昭和55～58年度）の高知空港拡張整備事業に伴い発掘調査が行われています。前回の調査以前にも、西見当遺跡などの弥生時代の遺跡の調査が行われており、高知平野における弥生時代を代表する遺跡として知られていました。また、空港の北に隣接して、室町時代の土佐国守護代である細川氏の居館とされる田村城館跡（南国市指定史跡）も所在しており、高知平野南部の遺跡の中心地帯です。

遺跡の範囲は、前回の拡張範囲外にも広がっており、極めて広範囲の複合遺跡です。遺跡の立地は物部川の自然堤防上であり、物部川の氾濫にも余り影響は受けることなく、現在まで残された貴重な文化遺産です。

前回の発掘調査では、縄文時代から近現代に至るまでの各時代の遺構、遺物が検出されていますが、中でも弥生時代と中世の2時期の遺構・遺物が最も多く、田村遺跡群の中心となる時代でした。

縄文時代では、磨消縄文や沈線文などを持つ土器片とともに、多量の打製石斧が出土しています。弥生時代では、前期初頭の集落跡と前期の小区画水田跡（足跡も発見）、中期末から後期前半の集落跡が発見され、全国的にも注目されました。古代では、平安時代の整然とした方向と配置を示した掘立柱建物跡が発見され、荘園（田村庄）との関連が考えられました。中世では溝に囲まれた屋敷跡（環濠屋敷跡）が発見され、母屋・納屋などの掘立柱建物跡や石組みの井戸なども検出されており、当時の生活の跡を知ることができました。また、遺物からすると時期的にも13・14・15世紀の3時期に分かれており、各時期による環濠屋敷の配置や田村城館後との関係を知ることができました。

前回（昭和55～58年度）調査分

弥生時代 竪穴住居跡・・・60棟

掘立柱建物跡・・・14棟

平成8年度調査分・・・・・・・・17,300㎡

弥生時代中期～後期・・・竪穴住居跡 68棟

掘立柱建物跡 9棟

平成9年度調査分・・・・・・・・48,000㎡

弥生時代中期～後期・・・竪穴住居跡 120棟

掘立柱建物跡 43棟

合 計 竪穴住居跡 248棟

掘立柱建物跡 66棟

3. 調査対象地

高知県南国市田村（高知空港の西拡張計画地内）

4. 調査期間

平成10年5月11日～平成11年3月31日（予定）

（前期 平成10年5月11日～11月30日）

（後期 平成10年12月7日～平成11年3月31日）

5. 調査面積

約53,000㎡

6. 調査体制

委 託 者 運輸省 第三港湾建設局 高知港湾空港工事事務所

調査主体 高知県教育委員会

調査実施 財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター

7. 調査方法

- (1) 今回の発掘調査範囲は、平成8年度に行われた試掘調査の結果により、空港拡張範囲の中で東半分を調査対象地としています。本調査の対象地の中でも進入灯を中心とした範囲から北西部の地域が遺跡の中心部分と考えられ、平成8～10年度の調査の結果からも弥生時代の集落の中心となっていることが判明しました。
- (2) 本調査は、試掘調査の結果と現地の状況により調査対象地を決定し、現状の1町四方の地割りを基準とした調査区名称を設定しました。今年度における調査区の名称は次のとおりです。
- (前期) C4・C6・E5・E6・E7・F3・F4・G4・H2・H3・J4-2・
J5・K3・L2・M1・M2・P2
- (後期) E6・F4・L2・N2・O2・P3・Q2
- (3) 各調査区ともに表土及び無遺物層は重機により掘削を行い、遺物包含層については人力により掘削を行い、遺構・遺物の検出を行いました。遺構の完掘後は航空写真測量により、遺構の全体測量を行っています。同時に各遺構・遺物については必要に応じて写真撮影や図面によって記録を残しています。
- (4) 現地発掘調査を実施するとともに、出土遺物の洗浄、注記、接合などの基礎的整理作業も同時に並行して行い、検出された遺構・遺物の概要について早期に確認する作業を実施しています。

8. 調査協力

高知県土木部港湾空港局 港湾空港振興課空港整備室 高知空港整備事務所
南国市教育委員会
田村・下田村地区を中心とする地元の方々

9. 調査担当

調査第2班長 森田尚宏
調査員 前田光雄 小島恵子 三橋麻里 山田和吉 吉成承三 浜田恵子
泉 幸代 坂本憲昭 坂本裕一 小野由香 田坂京子 島中宏一

10. 調査内容

今回の発掘調査の中で、各調査区の遺構の検出状況は以下の表のとおりです。

検出遺構

調査区	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑	溝跡	ピット	自然流路	その他
C 4	2		132	9	200		井戸1
E 5	1	2	93	5	269		内濠1
E 6			33	6	30	3	外濠1
E 7	31	15	80	24	340	6	
F 3	9	8	79	27	290	2	欄列2
F 4	29	18	187	36	1,000	2	欄列1
G 4		1	1	2	52		
H 2			37	4	300	1	
H 3			2		100		
J 4-2		6	3		43		
J 5	3	2	6	6	110	1	
K 3	13	31	9	10	500		
L 2	46	30	138	11	800	2	
M 1					2	2	
M 2					3	2	
P 2	1		3	7	1		
P 3				2			
Q 2	7	3	30	2	120	2	
合計	142	116	833	151	4,160	23	

平成10年度の調査では、上の表のように竪穴住居跡が142棟発見され、今までの合計は390棟となりました。最も検出数が多いのはL 2区の46棟であり、次いでE 7区では31棟、F 4区では29棟と中心部にまとまっています。やはりK区とL区の範囲で非常に竪穴住居跡が集中している状況が見られます。また、やや北部のE区においても合計55棟の竪穴住居跡が検出されており、K・L区に次いで密集度が高い範囲です。これらの住居跡は弥生時代中期から後期にかけての集落を構成するものであり、集落の範囲や構造からみても、やはり南四国最大の集落であることが確認されました。また、前期の環濠も内濠がE 5区で、外濠がE 6区で確認されました。環濠内部のC 4区では多数の土坑が検出され、大型壺等も出土しました。さらに、環濠外のF区においては前期竪穴住居跡と土坑群が検出され、環濠集落のあり方を考える重要な資料となりました。

出土遺物

調査区	遺物数 (コンテナケース)	主要な遺物
C 4	120	弥生土器・石鏃・石斧・石包丁・石錘・叩石・スクレーパー・管玉・ガラス玉・石錘・土錘・紡錘車
E 5	97	弥生土器・石鏃・石斧・石包丁・石錘・砥石・スクレーパー・鉄鏃・管玉・ガラス玉・土錘・紡錘車
E 6	54	弥生土器・石鏃・石斧・石包丁・叩石・砥石・ミニチュア土器
E 7	94	弥生土器・須恵器・土師器・瓦・石鏃・石斧・石包丁・砥石・銅鏃・ガラス玉・紡錘車・ミニチュア土器
F 3	128	弥生土器・須恵器・土師器・石鏃・石斧・石包丁・砥石・ガラス玉・紡錘車・ミニチュア土器
F 4	378	弥生土器・須恵器・土師器・石鏃・石斧・石包丁・叩石・砥石・管玉・ガラス玉・ミニチュア土器
G 4	1	弥生土器・石斧・青磁
H 2	38	縄文土器・弥生土器・土師質土器・備前・石鏃・石斧・石匙・石錘・叩石・砥石
H 3	3	縄文土器・石斧・石錘・叩石
J 4-2	2	弥生土器
J 5	20	弥生土器・石斧・石包丁・石錘・紡錘車
K 3	150	弥生土器・石鏃・石斧・石包丁・叩石・砥石・ガラス玉・白磁
L 2	77	弥生土器・石鏃・石斧・石包丁・叩石・砥石・石錘・石鏃・鉄鏃・勾玉・管玉・ガラス玉・ミニチュア土器・獣骨・炭化米
M 1	5	縄文土器・石鏃・石斧・石錘
M 2	10	縄文土器・石鏃・石錘
P 2	4	弥生土器・縄文土器
P 3	3	弥生土器
Q 2	30	弥生土器・石鏃・石斧・石包丁・ガラス玉
合計	1,214	

今回の発掘調査による遺物は、コンテナケース（プラスチックの遺物収納箱）に入れて1,214箱ほども出土しています。特にF 4区では378箱と多量の遺物が出土しており、E 6区の自然流路も現在調査中ですので最終的には200箱ほどの遺物量になりそうです。堅穴住居跡からは土器や石器以外にもガラス玉が数多く出土しており、L 2区では1棟の住居跡から150点以上のガラス玉がまとめて出土しており、注目されます。

11. 調査結果

各調査区の調査概要については、以下に順番に述べています。

(1) C区

C4区は昨年度調査されたC1区の西側であり、弥生時代前期環濠の内側にあたります。調査区の南端を内濠が横切っており、132基の土坑群と溝が検出されました。土坑の一部は後世に攪乱されていますが、北部を中心によく残されています。土坑は楕円形と隅丸方形に分けられ、深さは1mほどのものもあり、大型壺などの弥生土器とともにチャート製の石器やガラス滓ではないかとみられるものもあり、工房的な施設であった可能性が考えられます。

(2) E区

E5区はC4区の西側にあたり、やはり前期環濠の内濠の内側になります。調査区からは、内濠や土坑を中心とする遺構群が検出されました。内濠の検出長は約20m、最大幅2.6m、深さ1mの断面V字形をしており、埋土の状況から見れば一度に埋め戻されたような状態を示しています。C区からの環濠（内濠）全体をみれば、延長約100mが調査されたことになり、さらに北方で確認された部分とつなぐと南北160m、東西100mが環濠の範囲となります。土坑は93基が検出され、C4区と同様に多量の弥生前期土器とともに石器やガラス玉が出土しています。C1区からC4・E5区の調査により環濠の南半部を調査したことになりますが、現在のところ環濠内部には土坑群は存在するが堅穴住居跡は発見されておらず、前期環濠集落のあり方が問題となります。

E6区は調査区の大半がE3区から続く中期～後期の溝と自然流路です。流路は南西方向に伸びており、F区、K区、L区などで検出されています。流路の東側には前期の土坑も検出され、E2区から延びる環濠の外濠の一部も流路に切られています。確認されました。また、流路に先行する大きな土坑も発見され、コンテナケース40箱以上の多量の土器が投げ込まれており、注目されます。

E7区は昨年度調査が行われたE4区の東側であり、調査区の西側に堅穴住居跡群、東側では自然流路が検出されています。住居跡は弥生中期後半を中心として31棟確認され、他に掘立柱建物、土坑、ピットも存在しています。住居跡は非常に分布密度が高く、7～9棟の重複がみられ、建て替えや、拡張が頻繁に行われていたようです。大きさには直径8～10mの大形と直径4～6mの小形がみられますが、出土遺物の点ではさほどの大差はないようです。また東側では古代の溝が検出されており、須恵器、土師器などとともに、弥生時代に破棄された広型銅銚の破片も出土しています。

(3) F区

F3区はF1区とF2区に挟まれた調査区であり、F4区とともに遺構の密集度の高い調査区です。調査区の北端にはK区へつながる溝が、南端にはL区へ続く自然流路と溝が確認されました。その間に挟まれた微高地を中心に9棟の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑などが検出され、調査されました。住居跡には前期のものも1棟確認され、長期にわたる生活の場であったことを知ることができます。

F4区は昨年度調査されたF2区の東側にあたり、北東から南西へ向かって斜めに走る数条の流路によって挟まれた立地となっています。遺構は流路北側において特に密度が高くなっており、弥生時代前期から後期初頭までの遺構の激しい重複がみられます。中でも注目されるのは前期の遺構群です。前期の遺構として確認されたのは、大型の竪穴住居跡1棟、小型の竪穴住居跡3棟と周辺に散在する楕円形の土坑群等ですが、これらの発見により、前期の遺構が前期環濠の外側であるF区の中央部付近まで広がりをみせていることが分かりました。特に調査区北部で発見された竪穴住居跡は中央ビットの両脇に小ビットがある松菊里型住居（朝鮮無文土器文化の竪穴住居）に類似しています。一方、中期から後期初頭の竪穴住居跡は22棟確認されていますが、流路北側に近接する部分では特に激しい遺構の集中がみられ、この場所が当時非常に良好な立地条件であったと思われます。また、ここでは特に大型の住居跡が集中してみられるのも特徴としてあげられます。直径10mを越すST402などは、壁溝や柱穴が二重に巡っている様子から改修し拡張されたことが分かりますが、その中央ビットや床面から砥石や柱状石斧などの石器類が数多く出土しており、工房的な性格も持っていたようです。また、田村遺跡群の中期後半の住居跡では火災をうけた例がしばしばみられますが、ST408もそのうちの1例であり、被熱し炭化した柱や壁板などが床一面に散乱し、壁際の各所に土器が倒れている様子は当時の家屋内の状況をリアルに伝えています。

また、F4区では古代から中世にかけての遺物包含層が後世の削平を受けずに良好な状態で残されていたため、古代～中世の遺構が数多く確認されました。特に注目されるのは、整然としたコの字状の配置を示す大型の掘立柱建物群です。建物跡は全部で14棟確認されていますが、その柱穴の掘り方は一辺90～100cm前後の方形のプランであり、多くの柱穴には大形で扁平な川原石が礎盤（根石）として使われています。また、最も大きい3×5間の建物跡では、梁間5m×桁行9～10mにも及ぶ非常に大きな規模を持っています。各々の建物の配置についてみると、北側正面（主殿）にあたる位置には東西棟の建物が検出され、主殿に直交するように3×5間の南北棟の建物（脇殿）が左右対称に

に配置されています。西側の並びの南端にはすべての柱穴床面に礎盤を据えた小型の倉庫風の建物があります。また、中央には前庭部が大きく取られており、全体的に非常に強い規格性のもとに建てられた官衙風の建物配置となっています。建物の切り合いからみると、中央の東西棟建物の位置では、順に2間×5間、3間×5間、2間×3間と規模を変えながら3回にわたる建て替えが行われており、両側の南北棟建物の位置では、2~3回の建て替えが行われたことが分かりますが、いずれの建物も柱の並びは香長平野の条里方向(N-11°-E)に沿っており、真北から東に10°前後ずれるという一定の方向を守り続けています。

出土遺物については、柱穴及び古代の土坑からコンテナケース4箱ほどが出土していますが、8世紀後半から9世紀前半の土師器・須恵器の供膳具が主体であり、土師器の煮沸具と須恵器貯蔵具が少量伴っています。これらの遺物の年代からみれば、建物群の年代も8世紀後半から9世紀前半(奈良時代末から平安時代初め)と思われる。

また、南方に広がる小形の方形柱穴の柵列と総柱掘立柱建物跡と長方形の土坑群は、現在その時期や官衙風大型建物群との前後関係は明らかになっていませんが、総柱建物は長方形土坑に切られており、柵列も土坑群に先行しているものと予想されます。F区ではこの他に明確な古代遺構は確認されず、以後、中世の掘立柱建物の出現まで遺構・遺物が途絶えています。

(4) G区

G4区はG1区の南にあたり、F区から延びる舌状の高まりの南の縁辺に位置し、弥生時代の遺構が集中する範囲からは外れていると考えられていました。調査の結果は当初の予測と同様で、弥生時代の遺構はG1区から続く溝跡と少数のピットが検出されたのみでした。また、低地性の植物が茂っていたと考えられる有機物の多く入る黒色粘質土が堆積していることから地形的にも南側は低くなっていることが分かり、G4区は地形的にもF区に中心とする弥生時代の集落が立地する舌状の高まりの端部にあたると考えられます。この黒色土には中世と考えられる2×2間の規模の小さな総柱建物跡が確認されており、黒色土は中世段階でしっかりとした地盤になったと考えられます。

(5) H区

H2区では、中世の遺構・遺物とその下層から縄文時代の遺構・遺物が確認され、昨年度には上面の中世の遺構・遺物の調査が行われました。今年度は、縄文時代の遺物包含層より調査が開始されました。縄文時代の包含層や遺構は調査区の中央部から西側で確認され、中央部より東側では包含層は確認できず、縄文時代の遺構が掘り込まれた安

定した黄色土が急激に東に向かって落ち込んでいることが判明し、大きな流路が存在していたことが確認されました。

調査区の西側で検出された縄文時代の遺構は、ピット、土坑、焼土などであり、期待された住居跡は検出できませんでしたが、縄文土器は数多く出土しており、九州系の鐘崎式と考えられるものが多くみられました。石器も石錘がその多くを占めており、東側のH1区と同様の遺物の出土状況を示しています。このことからH2区の縄文時代の遺構・遺物はH1区と同一の性格を持つものであり、H1区で確認された縄文時代後期の集落の一部と考えられます。調査区の東側で確認された流路の埋土中からは、縄文土器は確認されず弥生土器のみが出土しており、この流路が流れていた時期は弥生時代と考えられます。縄文時代以降、流路によって削られた可能性も否定できませんが、今回の調査でH1区で確認された鐘崎式土器を持つ縄文時代後期の遺跡の東への広がり、H2区の中央部までであることが確定しました。

H3区はH1区の西側にあたり、前回調査の行われたシマイテン地区の隣接地でもあり、縄文時代後期の遺構・遺物の検出が期待されるとともに、H1区で出土した鐘崎式土器とシマイテン地区で出土した彦崎KI式との関係が解明されることが期待されました。しかし、H1区から続く縄文時代の包含層は西側に行くに従って薄くなり、土器もほとんど含まれておらず、遺構も確認できませんでした。H3区は地形的には、南側が高く、北側が低くなっています。この低みは東西方向に延びていることがH1区やM区の調査で明らかとなっており、流路跡と考えられます。この低地部分で深掘り確認を行った結果、縄文後期の遺構面である黄色土下約50cmの所から縄文土器がわずかですが出土し、この黄色土も河川堆積によるものであることが明らかになりました。H3区の東側のM区では、この層から縄文時代中期の土器が確認されており、当調査区で出土した土器も同時期ではないかと考えられます。これらのことから、流路跡は縄文時代中期には埋まったと考えられますが、低地の状態は後期まで続き、遺構はこの部分には営まれず、調査区の南側の高まりの部分に立地したと考えられます。

今回の調査の結果、H1区で確認された鐘崎式土器が出土する縄文時代後期の遺跡の範囲が確定したと思われます。また、彦崎KI式土器が出土したシマイテン地区との間には完全な土器の空白部分が存在する事が判明し、両者は時期差のあるそれぞれ別の集落である可能性が高いと考えられます。

(6) J区

J5区では、堅穴住居跡3棟、土坑6基、ピット、溝跡等が検出されましたが、住居跡や土坑は調査区を南西方向に横切る溝の北側で検出され、ピットの多くは南側で検出されています。また、周辺の調査区においても、この溝を境に遺構の性格が異なっていると考えられ、溝の南東側では掘立柱建物跡が集中して検出され、さらにその東側のE区などでは住居跡が集中して発見されていますが、溝の北西側では遺構の数は少なくなっています。遺構の検出面の土も礫の多く混じる南東側と、ほとんど礫の混じらない北西側というように異なっています。これらのことから、この溝は集落を区画する溝の可能性が考えられ、J5区で検出された遺構は、溝の北西側のO区やI・N区で確認された遺構などと同じ集落の遺構の可能性が考えられます。また、溝は砂や砂利で埋まっており、洪水などによって短期間に埋まった可能性が高く、集落の廃絶を考える上でも重要な資料を提供していると考えられます。

(7) K区

K3区は中央部をSD301、SD102の弥生時代中期から後期にかけての大溝2条が縦走しています。北側のSD301は隣接するF区から延びており、K3区での全長は150m、幅3~4m、深さ60~70cmと規模の大きい溝です。また、この大溝からは枝分かれした小溝1条が並走しています。SD102は調査区東端でSD301と寄り添い、F区へと続きます。南側部分ではすでに調査が終了していますが、鈎状に曲がり、再び本調査区に現われており、幅2m、深さ約80cmの規模で西側部分では礫層をV字状に掘り抜いています。この2条の溝は、集落を囲む環濠か、または灌溉用水の機能が考えられます。

弥生時代中期から後期の堅穴住居跡は13棟が検出されています。1棟のみが方形で他は円形の住居跡です。ST310は直径約8.6mの最大規模の堅穴住居跡であり、床面上には炭化材や焼土がみられ、焼失住居と考えられます。住居内からはガラス玉も出土しています。また、ST304の住居内の土坑からは幼児大の粘土塊が貯蔵されていました。

調査区中央部では、掘立柱建物跡が20棟ほど集中して検出され、特に中央部北側に密集する傾向があります。規模は1×3間のものが大部分であり、柱穴は直径30cm前後と比較的小さいく、時期は弥生時代中期から後期にかけてのものと考えられます。

弥生時代以外のものとしては、調査区西端で現在の地割に並走するように古代の溝2条(SD302・303)が南北に走り、南部分では合流して1条となります。幅は1.2~1.5m、深さ10~20cmであり、溝内には中礫が敷き詰めたとように出土しています。機能と

しては古代の条里地割，または道の可能性も考えられます。東南隅では中世の柱穴が数個と遺物が少量発見されています。

(8) L区

L2区はK区の南に位置し，昨年度調査されたL1区の西側です。L1区の調査結果からL2区の遺構密度は高くはないと考えられていましたが，結果的には竪穴住居跡と掘立柱建物跡を中心に非常に遺構密度が高いことが判明し，K区と同様に遺構が互いに重なる様な状況で検出されました。遺構の集中状況は，調査区の中央部を東西に横切り延びる溝まで続いており，溝の南側では弥生時代の遺構は確認されていないため，弥生集落の南限を画するのがこの溝であることが確定しました。

検出された遺構は，竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑，溝跡，ピットなどですが，住居跡は，数度の建て替えが行われたとように数棟が重複する状態で検出されたものや，同じ住居跡が拡張された状態のものも検出されています。住居跡の中には直径8mと規模の大きいものがありますが，壁が焼けて赤化しており，床面上には炭化材や焼土がみられる焼失住居です。また，この住居跡からは150点を越える多量のガラス小玉が出土しており，1棟の住居跡からの出土量としては県下で最大です。

今回検出された遺構のなかで注目されるのは，掘立柱建物跡が現在確認されているだけで30棟とまとまって検出されたことです。掘立柱建物跡はその柱穴の規模によって3種類に分けることができ，最も規模の大きい柱穴は，幅約1.2m，長さ約1.5m，深さは約90cmと非常に大きな掘方を持ち，わずかに残る柱痕からみて柱の直径は40cm以上であったと考えられます。この建物の規模は，1間×2間ながら梁間3.2m×桁行5.4mと柱間も広く，太い柱のしっかりした建物だったと考えられ，東西棟2棟が並行して検出されています。この様な規模の建物跡は他の調査区では確認されておらず，田村遺跡群でも特殊な建物跡と考えられます。県外では，吉野ヶ里遺跡（佐賀県）や池上曾根遺跡（大阪府）等の弥生時代を代表するような大規模な集落遺跡からも大きな柱穴を持つ建物跡が検出されており，神殿や物見櫓，特殊な倉庫などと考えられています。今回，L2区で検出された建物跡も同様に特殊な用途を持った建物と考えられ，さらにやや規模は小形になりますがやはり一辺1m以上の掘方を持つ建物群が集中していることからすれば，集落の南端部に位置するL2区は特殊なエリアであったと考えられます。また，この掘立柱建物群の方向は集落の南端を区切る溝の方向に並行しており，集落内の建物群に関する何らかの規格性をみることもできます。

(9) M区

M1・2区はL区の南側で、H区の西側にあたります。MI区は前回の調査で縄文時代後期の遺物が出土したシマイテン地区に隣接しており、H区同様に縄文後期の遺物包含層の広がりが期待されました。調査の結果、弥生時代に関連する遺構・遺物の発見はなく、やはり弥生集落の範囲はL区の溝を境界としており、溝より南には遺構が形成されていないことが再確認されました。縄文時代では自然流路と少量のピットが検出されましたが、住居跡等は発見されませんでした。

M区の調査で注目されるのは、縄文時代後期だけではなく縄文前期から中期の土器類が出土したことです。縄文前期・中期の土器は県下的にも出土数が少なく、田村遺跡群でもまとまって検出された初の出土例となりました。出土した土器は、瀬戸内の縄文編年では羽島下層式（前期）、船元Ⅱ～Ⅲ式（中期）に併行するものと考えられます。これらの土器は、自然流路への堆積土中から出土したのですが、調査区の周辺に集落が形成されていたと思われます。自然流路については、縄文中期には南北幅約40mの河川が東から南側にかけて流れており、その後次第に埋まり流路幅も縮小し、低地状となったようです。

(10) P区

P区はK区の西側の調査区であり、弥生集落のほぼ西限となっています。昨年度調査が行われたP1区でも竪穴住居跡4棟とK区の遺構密度からすれば極端に少なくなっており、今回のP2区ではP1区にかかっていた住居跡1棟とさらに遺構は少なくなっています。住居跡以外に検出された遺構は少数の土坑と溝跡でしたが、集落の南限と同じように西限を区切る溝はなく、西方へ落ち込んでいく微高地端部の自然地形が集落の範囲とされていたようです。溝は南北方向であり、1条は西へ曲がった後、南の調査区外へとさらに延びています。

(11) Q区

Q2区はL区の西に隣接する調査区であり、竪穴住居跡、土坑、溝等が検出されています。住居跡は調査区の北端部に7棟ほどが集中して検出されており、K区やL区の住居跡密集地域の南西端部に当たっています。調査区の南端部では集落の南限の溝がかかっており、調査区全体には土坑やピットが東半分を中心にみられます。集落の西端部ですので住居跡の重複も少なく、L区のような大型の掘立柱建物跡も見受けられません。昨年度に調査されたQ1区では少量のピットと土坑のみであり、P・Q区が遺跡の西限となっています。

12. 調査成果

田村遺跡群の発掘調査も平成8年度に開始されてから3年目が終了しつつあります。この間の調査面積も約118,300㎡となり、当初の調査予定面積の90%以上が終了したことになります。内容的にみても、今年度の調査によって弥生時代を中心とする集落の全容解明に近づいており、多大な成果を得ることができたのではないかと考えます。

(1) 縄文時代

H・M区を中心に縄文時代の遺物が出土しています。今回の調査では特にM区で縄文前期・中期の遺物が確認され、従来は縄文後期までで終わっていた沖積地での発見が目されます。縄文前期・中期の段階ですでに平野部へ生活のエリアを広げていたことが判明し、新たな平野部における縄文遺跡の立地が考えられます。

(2) 弥生時代

今回の発掘によって弥生時代の集落のほぼ全域の調査が行われたこととなります。集落には、昨年度から引き続き行われた前期の環濠集落とその西南部を中心とする中期から後期の集落が広範囲に存在しています。

前期の環濠集落は、2重の環濠を持つことが確認されていますが、今年度で環濠内部も含めほぼ南半分の調査が行われたこととなります。環濠の中で内濠は幅約2m、長さ約120mを検出しており、南辺はほぼ直線的に伸び断面形はU字形です。東端は自然流路に開口しており、西辺は緩やかなカーブを描き北へ延びています。カーブから北にかけての断面形はV字形となっています。外濠は内濠から30mの間隔をおいて南辺に検出されており、断面形はV字形です。環濠の囲われる範囲は、内濠で南北160m、東西100mですが、外濠が内濠と同様に掘られていたとすれば南北220m東西130mの範囲となります。環濠の内部からは多数の土坑が検出されましたが、竪穴住居跡は発見されませんでした。また、内濠と外濠の間と外濠の周辺にも土坑が検出されており、さらに外濠の外側であるF区で前期の竪穴住居跡が検出されました。このことから現時点では、田村遺跡群の前期環濠は集落全体を囲うものではなく、居住地域は環濠外にあったと考えられます。環濠により囲まれる範囲には貯蔵穴などの土坑群が集中しており、集落の中での特異なエリアを形成していたと思われる。

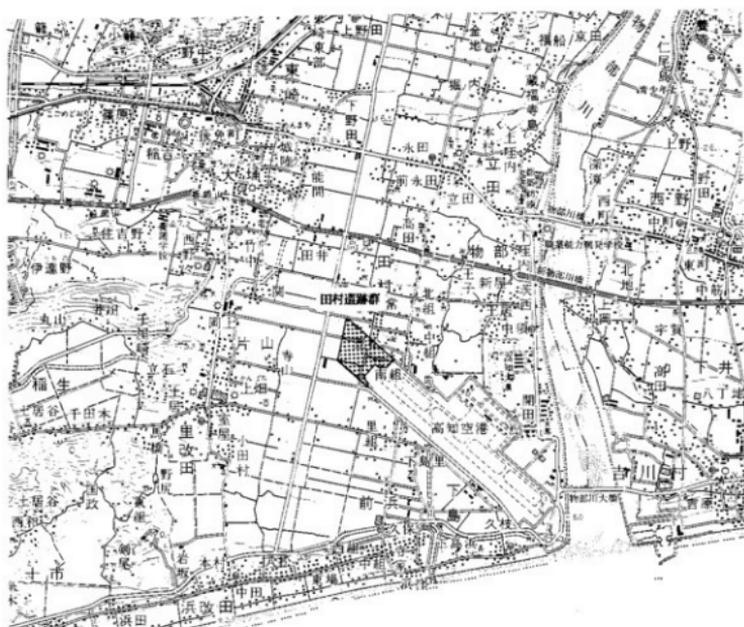
弥生時代中期から後期の集落の範囲は、調査範囲全域にほぼ広がっていますが、特にE・F・J・K・L区を中心としており、中でもE・F・K・L区において竪穴住居跡の集中がみられます。今回の調査で発見された竪穴住居跡は142棟にもおよび、平成8年度の68棟、平成9年度の120棟と前回調査分の60棟を加えると、現在のところ396棟の竪

穴住居跡が確認されたこととなります。さらに今後に残された部分の調査を考えますと最終的には400棟をこえる堅穴住居跡が存在することが確実です。また、今年度の調査で注目すべきはL2区で検出された掘立柱建物群です。中でも1間×2間の2棟の建物跡は柱穴の掘方も大形であり、柱痕からすれば柱の太さも直径40cm以上であり、今まで検出されていた掘立柱建物跡と比較すれば格段の規模の大きさとなります。柱や柱穴の大きさからすれば、建物としては重量物を支えるか、槽のような高い構造が考えられます。どちらにせよ非常に規模の大きな特殊な建物と考えられます。さらに周辺にも通常の掘立柱建物に比べ規模の大きな建物が集中しています。これらの建物群は中期後半～末にかけての時期と考えられ、同時期の堅穴住居跡も一定存在しますが、集落の中では掘立柱建物群を中心とした特定の地域と考えられます。

集落の全体的な構造と時期的な変化をみると、前期の環濠を中心とする集落は、前期後半になると北へ移動しているようです。C区やE区ではこの時期の遺構は確認されませんが、北から流れる自然流路中には前期後半から中期前半の土器などが多量に流れ込んでおり、やはり調査区外の北側に当該時期の集落の中心が存在していると考えられます。中期後半になると、今回の調査対象地に遺構、遺物が現われてきます。全体的にみると各調査区では物部川の旧流路である自然流路が発見されており、特にB・C区やE区の流路は幅約10m、深さ約2～3mと大きく、これらの自然流路が弥生時代の集落の立地と深い関連性があったことが考えられます。また流路の中からは多量の土器や石器が出土しており、当時の生活をうかがうことが出来ます。中期を中心とする住居跡はやや北寄りを中心として全体的に広がっていますが、先に述べたように南端部に大型の掘立柱建物群が集中しており、集落の中でも一般的な居住範囲と祭祀などを行う特殊な場所が分けられていたのではないかと考えられます。

(3) 古代

古代においては、F4区で14棟の掘立柱建物跡が検出されました。これらの建物の柱穴は一辺1mほどの規模の大きいものであり、多くの柱穴には根石が入れられていました。建物の配置は南に開くコの字形であり、前回調査で検出された古代の建物群とはほぼ同規模であり、建物配置も非常に良く似ています。このような配置を持つことを考えればいずれも公的な性格を持つものではないかと思われませんが、二つの建物群の時期は、8～9世紀と考えられることから、やはり田村庄と関連する可能性も検討しなければなりません。



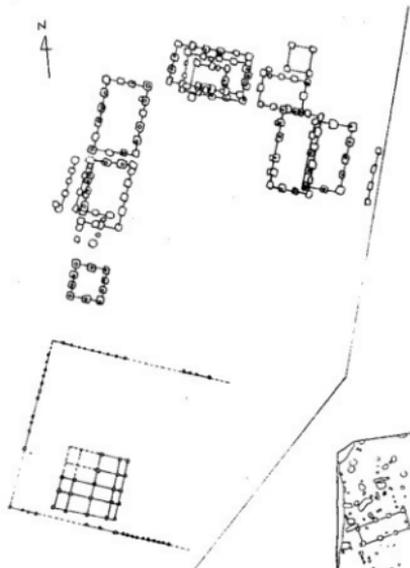
田村遺跡群 位置図(S=1/50,000)



物部川 旧河道図

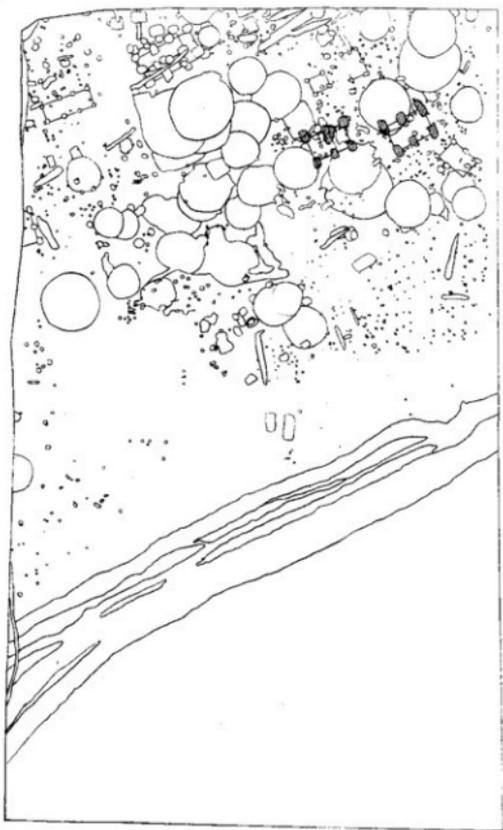


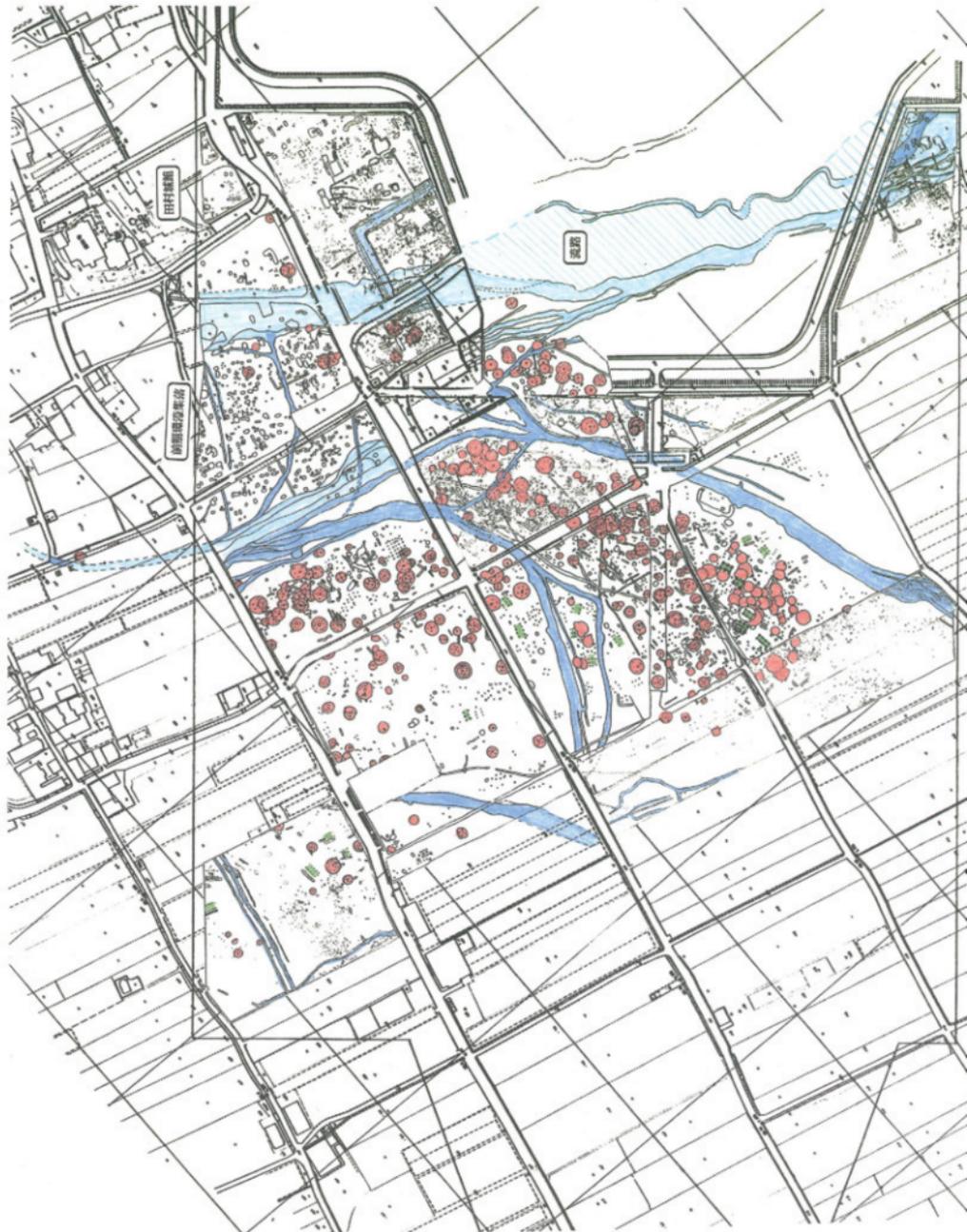
調査区配置図 (S=1/5000)



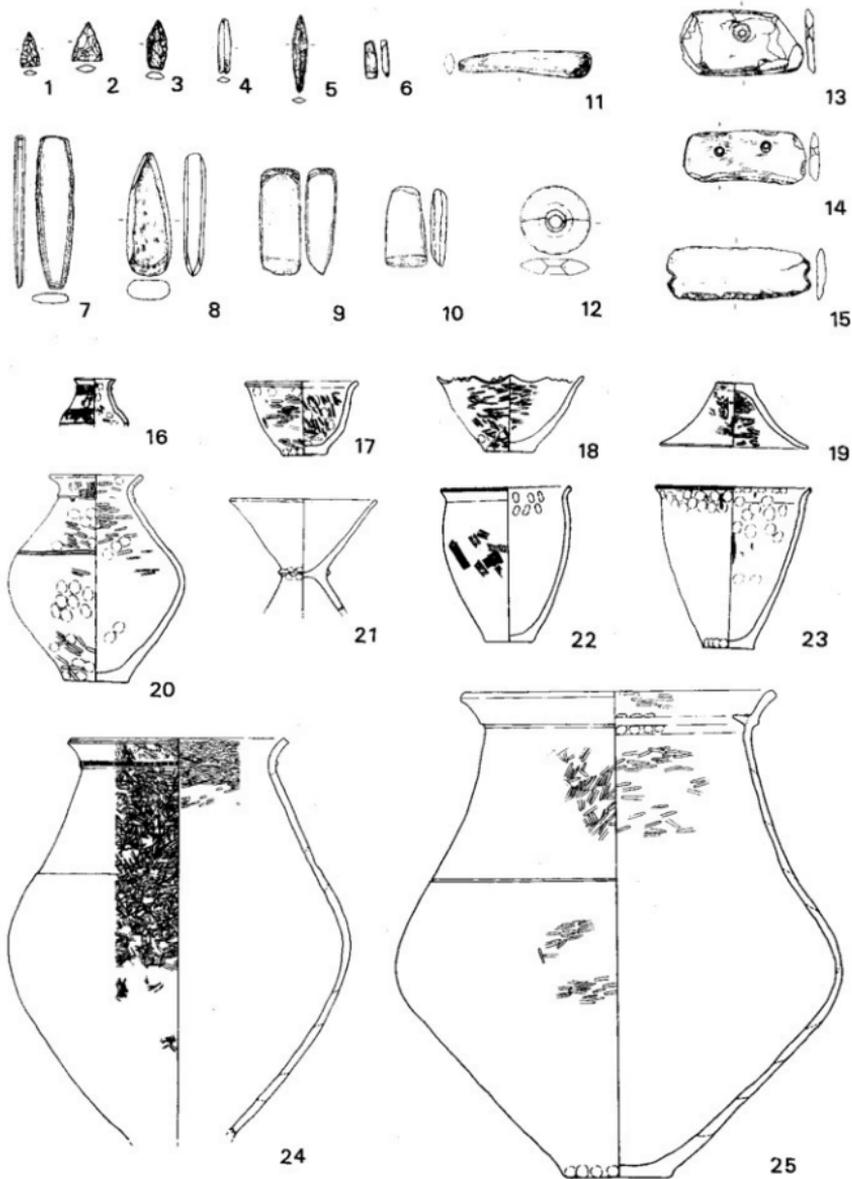
F4区古代立掘柱建物跡配置図 (S=1/500)

L2区掘立柱建物跡配置図 (S=1/500)

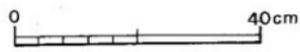




遺構配置図 (S=1/2500)



石器·弥生前期土器





26



27



28



29



30



31



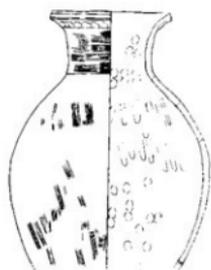
32



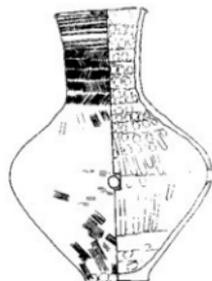
33



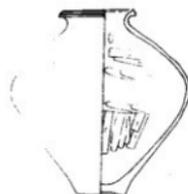
34



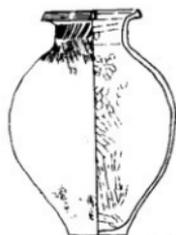
35



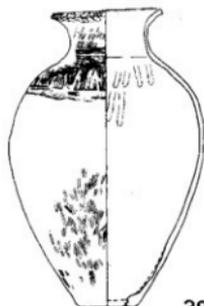
36



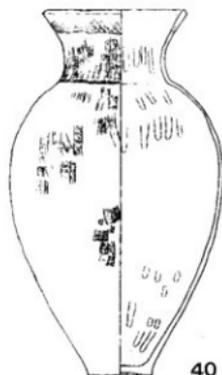
37



38



39



40

弥生中期～後期土器





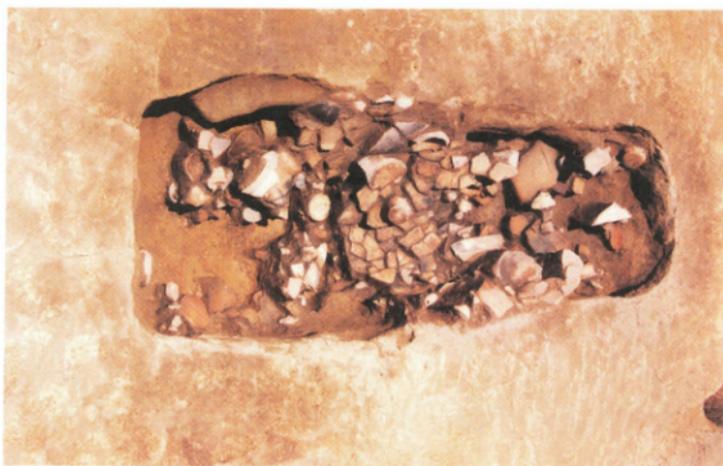
航空写真 全景



C4区 遺構検出状況



C4区 完掘状況



C4区 土坑遺物出土状況



E5区 遺構検出状況



E6区 遺物集中出土状況



E7区 遺構完掘状況



F4区 古代構掘立柱建物跡完掘状況



F4区 弥生遺構調査状況



K3区 遺構完掘状況



K3区 掘立柱建物跡完掘状況



L2区 遺構検出状況



1.2区 掘立柱建物跡検出状況



1.2区 土坑遺物出土状況



M区 調査状況



C4区 出土大型壺